

# レオ・ベルクのエッセイ「未来小説 *Der Zukunftsroman*」(1899) にみる ドイツ語圏の初期サイエンス・フィクションのジャンル名と特徴

徳永菜摘野

## 序

19世紀後半以降のドイツ語圏では、今日のサイエンス・フィクション(SF)の先駆となる作品の発表点数の増加に伴い、この新ジャンルの名称がさまざま考案された<sup>2</sup>。多数のバリエーションのうちもっとも定着した名称が、ドイツのエッセイスト、レオ・ベルク(Leo Berg 1862-1908)の文芸評論の表題と同じ「未来小説 *Zukunftsroman*」であった。この名称はジャンルの主要な関心事(未来)と、主な形式(小説)を的確かつ簡潔に表現している。ドイツ語圏のSF研究では、ベルクの本エッセイはジャンルの成立期における理論的なテキストの一つと見なされており<sup>3</sup>、また未来小説に関する初期の批評としても注目に値する。本研究ノートでは、ベルクのエッセイから、未来小説というジャンルを彼がどのように定義し、その特徴をどのように捉えていたのかを読み取る。そして近年のドイツ語圏のSF研究において未来小説がどのように扱われているか、その一端を探ってみたい。

## 1. エッセイの概要と未来小説の定義

ベルクの「未来小説 *Der Zukunftsroman*」は、1899年11月発行の文芸雑誌『文学のこだま—文学の友のためのセミマンスリー』に掲載された。同エッセイの概要は以下の通りである。彼はまず、前近代的な叙事詩が衰退する中で未来小説がそうした叙事詩に代わる文学の一部を形成している点を指摘し、次に未来小説のジャンルとしての特徴を大掴みに述べ、最後に三つの未来小説を分析する。それらは、ドイツのギムナジウム教授、作家クルト・ラスヴィッツ(Kurd Laßwitz 1848-1910)の、地球人と火星の接触を描いた『二つの惑星で *Auf zwei Planeten*』(1897)、ドイツの経済学・統計学教授、詩人マックス・ハウスホーファー(Max Haushofer 1840-1907)の、科学技術が高

度に発展した1999年の地球に、天体の衝突による滅亡の危機が迫る『宇宙の炎 *Planetenfeuer*』(1899)、米国の小説家フランク・R・ストックトン(Frank R. Stockton 1834-1902)の、表題がその内容となっている『北極と地殻へ *Zum Nordpol und Erdkern*』(1899)(英語版『サルデイスの巨石 *The Great Stone of Sardis*』1898)である(vgl. 163ff.)。

ベルクが、「すべてのいわゆる国家小説と未来小説」(161)と書いていることから、未来小説という名称は当時一般的であったことが分かる。未来小説とは、いまだ存在しないが未来において存在しうる国家、社会、あるいは技術と自然科学の事物を扱う文学である(vgl. 161f.)。未来はまたこのジャンルの作家たちにとり現代の凹面鏡としての価値を持つ(vgl. 163)。ベルクは未来小説と、彼自身は「教育小説 *Erziehungsroman*」と呼ぶ教養小説や風刺文学との類似(vgl. 162)、未来小説とキリスト教の千年至福説との比較にも触れており(vgl. 165)、これらのことから彼が同ジャンルを多面的に捉えようとしていたことがうかがえる。

## 2. 未来小説の下位ジャンルと人間性からの乖離

ベルクのエッセイによると、すべての未来小説は、「国家小説 *Staatsroman*」と「発明小説 *Erfindungsroman*」に分類される(vgl. 161)。このうち、国家小説はユートピア小説の下位ジャンルを指すと思われることから<sup>4</sup>、彼はユートピア小説の下位ジャンルを、未来小説の下位ジャンルに組み込むことで、未来小説を部分的にユートピア小説の伝統を汲むジャンルと見なしたようだ。

未来小説の下位ジャンルとしての国家小説では、「未来国家あるいは未来社会は所与のものとして仮定される。つまり、ある理論はそれが生へ翻訳

されることによって、具体的に説明されるべきである」(161)。一方、発明小説は、「技術や自然科学の諸問題について紡ぎだされた幻想的な文芸欄向き読み物<sup>5)</sup>」(ebd.)を指す。さらにベルクは発明小説に、SFに特徴的な、人間像や人間性からの乖離を19世紀末にいち早く指摘した。

すでにしかしながらそれら〔発明小説〕は人間的なものの外へと重点を移した。というも人間的なものは技術と自然科学を通しまったく触れられないか、あるいはたんに副次的に触れられるにすぎないからだ。それゆえ実際これらの作品における人間の表現はたいていまったく無力である。(162)

ベルクによると、人間の外への焦点のずらしは未来小説全体の特徴でもある。なぜなら、人間と国家の改善は「生の部分を除去し、生を希薄にし、人間的なものの中で退屈な引き伸ばしをする」(ebd.)ことに帰結するからだ。「未来小説はゆえに芸術的にと同様、人間的にたんに貧しく、空虚である。」(ebd.)

### 3. 近年のSF研究における未来小説の扱いとジャンル名の変遷

ローラント・インナーホーファーは「技術的な未来小説 *technischer Zukunftsroman*」を「(初期ドイツの)サイエンス・フィクション」と「同義に用い」ている<sup>6)</sup>。それに対し、ハンス・エッセルボルンは未来小説とSF、二つの名称を使い分けることで、両者を明確に区別する立場だ。エッセルボルンが未来小説とSFを区別する根拠は、ドイツ語圏でのジャンルの名称の変遷である。

「1950年代以降〔中略〕英語からの翻訳〔中略〕により徐々に未来小説にかわってサイエンス・フィクションという概念が普及した」<sup>7)</sup>。さらに彼は次のように指摘する。「Science Fiction という英語の概念の使用はアングロアメリカの模範の漸次的、部分的な受容と同時に現れた。」<sup>8)</sup>つまり、「描写と説明」、「省察と分析」、「日常性」、「個々の点に関する新発明」によって特徴づけら

れる未来小説は、「アクションとダイナミック」、「娯楽とサスペンス」、「特別な出来事(センス・オブ・ワンダー)」、「技術的に作り上げられた未来世界」を特徴とするアメリカSFの影響を受けて変容していった<sup>9)</sup>。別の箇所ではエッセルボルンは事態をより端的に説明する。「西〔独〕では〔19〕50年代に技術的な未来小説が意味を失い、〔19〕60年代以降アメリカのサイエンス・フィクションが模倣されるようになった」<sup>10)</sup>。

以上の解説から、エッセルボルンが未来小説という名称を、1950年代以前のドイツ固有の原始的なSFと、1950年代以降の西ドイツにScience Fictionとして入ってきたアングロアメリカSFに影響を受け、変化したドイツ現代SFとを区別するために用いていることは明らかだ。

### 結び

しかし、これ以上1950年代以降のドイツ語圏のSFに深入りすることは、本稿の企図を逸脱してしまう。また東ドイツのSFは、主に「ユートピア文学 *utopische Literatur*」と呼ばれ、共産主義の未来の理想を反映して西独SFとは異なる発展を遂げたのだが<sup>11)</sup>、この点も本稿の扱いきれる問題ではなくなる。そこで1950年代以前の、サイエンス・フィクション、あるいはユートピア文学と呼ばれる前のドイツ語圏のSFを表す概念として主に未来小説という名称が使われていたし、現在も使われていることを再確認するとどめたい。未来小説はドイツ語圏のSFの伝統としていまも生き続けている。

#### \* テキスト

Berg, Leo: Der Zukunftsroman. In: *Das Litterarische Echo. Halbmonatsschrift für Litteraturfreunde*. Jg. 2 (1899-1900), Heft 3 (1. Nov. 1899), Spalte 159-165. 同エッセイから引用・参照する際は頁数のみを示す。引用箇所中の〔 〕は筆者による補足等を表す。同エッセイならびに外国語文献からの引用箇所の日本語訳はすべて筆者により、外国語文献で隔字体や斜体により強調されている箇所の日本語訳には傍点を付す。

\*注

- 1 19世紀から20世紀初頭のこのジャンルの作家の人数と発表された作品の点数の目安として、以下のナーグルの研究の巻末書誌「資料（通俗読み物と実用書）」では、1801年から1850年までで作家14人（うち非ドイツ語圏作家4人）の23点（うち翻訳を含む非ドイツ語作品6点）を数えるだけであるのに対し、1851年から1917年まででは作家114人（うち非ドイツ語圏作家20人）の204点（うち翻訳を含む非ドイツ語作品40点、アンソロジー7点）に上っている。Vgl. Nagl, Manfred: *Science Fiction in Deutschland*. Tübingen 1972, S. 243-252.
- 2 ベルクの本エッセイ以前に発表されたこのジャンルの名称の例として、ドイツの作家・自然哲学者ヴィルヘルム・ベルシェ（Wilhelm Bölsche 1861-1939）の考案した「自然科学的なメルヒェン naturwissenschaftliches Märchen」がある。Vgl. Bölsche, Wilhelm: Naturwissenschaftliche Märchen. In: *Neue Deutsche Rundschau (Freie Bühne)*. Jg. 9, Quartal 1 u. 2 (1898), S. 504-514, S. 508. ベルシェの上のジャンル名とよく似ているのが、ベルシェが上のエッセイでジャンルの代表的な作家として挙げたクルト・ラスヴィッツによる「科学的なメルヒェン wissenschaftliches Märchen」であり、これについては次の拙稿を参照。「クルト・ラスヴィッツ 『二つの惑星で *Auf zwei Planeten*』とゲーテの自然認識—ラスヴィッツのエッセイ集『諸現実』と『精神と目的』を手がかりにして』『モルフォロギア』44 (2022) 67-91頁、70-71頁。ジャンル名のその他のバリエーションに関しては以下の拙稿を参照。Die vergessene Vorgeschichte des kritisch-posthumanistischen Phantastischen: Der Science Fiction-Roman *Auf zwei Planeten* (1897) von Kurd Laßwitz. In: *Akten des JGG-Kulturseminars 2021/2022*. Bd. 2, München 2023, S. 97-112, S. 98.
- 3 Vgl. Friedrich, Hans-Edwin: *Science Fiction in der deutschsprachigen Literatur*. Tübingen 1995, S. 190f.
- 4 19世紀までのドイツ文学には公共生活、公共性、集団の中の個の幸福、個同士の共存が主題となるユートピア小説というジャンルが存在しており、それには現状とは異なる理想の国家・社会形態を具体的に示す「国家小説 Staatsroman」と、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の系譜をひく孤島の物語である「ロビンソンもの Robinsonade」の二つの下位ジャンルがあった。饒田収「解説—ドイツ・ユートピア小説試論」『ユートピア旅行記叢書』第8巻、1999年、411-431頁参照。
- 5 ベルクによると、文芸欄向き読み物は「現代の未来小説の基本形態」（161）である。
- 6 Innerhofer, Roland: *Deutsche Science Fiction 1870-1914*. Wien u.a. 1996, S. 11.
- 7 Esselborn, Hans: *Die Erfindung der Zukunft in der Literatur*. Würzburg 2020, 2. verbesserte Aufl., S. 320.
- 8 Ebd.
- 9 Ebd., S. 323.
- 10 Ebd., S. 264.
- 11 Vgl. Draut, David: *Zwiespältige Zukunftsvisionen*. Marburg 2014, S. 23, 114.